

國學院大學學術情報リポジトリ

「満州」引揚げ体験を題材としたドラマにおける表
象：1990年代以降の日本ドラマを例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-10-22 キーワード (Ja): 「満州」引揚げ, 表象, 記憶, 加害, 被害 キーワード (En): 作成者: 李, 雅琳, Li, Yalin メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000964

「満州」⁽¹⁾ 引揚げ体験を題材としたドラマにおける表象 — 1990年代以降の日本ドラマを例に —

The representation in dramas about the experiences of repatriation
from Manchuria: a case study of Japanese dramas since the 1990s

李 雅 琳

キーワード：「満州」引揚げ 表象 記憶 加害 被害

关键词：“满洲” 返迁 表象 记忆 加害 受害

要旨

本稿は1990年代以降の「満州」引揚げ体験を題材とした日本ドラマを研究対象とし、テキスト分析法でドラマにおける「満州」引揚げ体験に関する表象を考察し、ドラマによってどのような「満州」引揚げ体験の記憶が構築されたかを明らかにした。数多くの「満州」引揚げ者は苦難に満ちた引揚げ体験を強いられたという被害者としての側面があると同時に、事実上日本の「満州」支配と植民に加担したという加害者としての側面もある。しかし、分析した結果、選定した6本のドラマの中で、『生きのびて』は「満州」引揚げ体験を比較的客観的に語っているが、ほかの5本のドラマ（『赤い月』『開拓者たち』『遠い約束～星になったこどもたち～』『レッドクロス～女たちの赤紙～』『どこにもない国』）は被害の側面を大いに訴えているながらも、加害の側面をあまり深く掘り起こさない傾向にある。

摘要

本論文以日本1990年代以来の“满洲”返迁经历题材电视剧为研究对象，运用文本分析方法对电视剧中的台词、场景等进行分析，考察了电视剧叙事中所呈现的“满洲”返迁经历相关表象，探究了电视剧所构建的“满洲”返迁经历文化记忆。许多“满洲”返迁者在返迁过程中遭遇了各种苦难，有其作为受害者的一面；但同时返迁者作为曾在“满洲”生活的移民，事实上是日本对“满洲”殖民统治的参与者和帮凶，也有作为加害者的一面。然而，笔者通过考察发现本论文选定研究的6部电视剧中，除了《活下去》较为客观地描写了日本人的“满洲”返迁经历外，其余5部电视剧（《红月亮》《开拓者们》

- (1) 現在では、中国の固有の領土である「満州」を中国東北部または東三省と呼び、日本が九一八事変によって作り上げた傀儡国家である「満州国」を偽満洲国または偽満と呼ぶのが適切である。ただし、本稿では、日本による「満州」支配の侵略性を鮮明にするために、引用の場合を除き、「満州」「渡満」「在満」「満州国」といった言葉は、括弧を付して表記することにする。なお、開拓民や開拓団と呼ばれる日本農業移民の入植は、開拓と程遠い侵略的性格を帯びるため、開拓、開拓民や開拓団などの関連用語も括弧をつけるべきであるが、便宜上本稿では括弧を省略し、そのまま使うことにする。

《遙遠的約定：變成星星的孩子們》《紅十字：女人們的入伍通知單》《不存在的國度》）都傾向於強調返遷者的受害者身份，而鮮少深入挖掘其作為加害者的事實。

一、はじめに

1945年、日本の敗戦とともに数多くの日本人が中国、旧ソ連や朝鮮から引揚げをしてきた。民族大移動とも言えるほどの引揚げのなか、「満州」から日本へ帰還した日本人が特に多かった。しかし、戦後日本において、引揚げの体験は忘却されつつあり、あまり日本社会の想起の対象とはなっていない。その上、終戦から80年近くが経過し、引揚者が一段高齢化し、戦後世代が日本人口の8割以上を占める現在において、引揚げの歴史が徐々に風化しつつある。

この引揚げ体験が忘却されずに後世に継承されるには、「文化的記憶」⁽²⁾を創出しているマスメディアの力が無視できない。マスメディアは、引揚げ体験を継承するための貴重な資料を提供し、日本社会の引揚げの記憶に大いに関与している。マスメディアの中でとりわけ重要なのはテレビであり、伊藤守氏(2002)によると、テレビは、歴史に関しても独自の「語り」とイメージを産出し、公共の記憶をかつてない規模で共有することを人々に強いている⁽³⁾。こうした中、テレビドラマ（以下、ドラマと略称する）はそのエンターテインメント性で多くの視聴者を惹きつけ、「満州」引揚げ体験はドラマを通じて表象され、継承され、さらに新たな記憶として再構築される。引揚げの歴史が風化する中、ドラマから「満州」引揚げの歴史についての知を獲得・構築している人が少なくないと考えられる。それにもかかわらず、学術界では「満州」引揚げ体験に関する研究は少ないが、それに関するドラマについての考察はあまり見られない。したがって、本稿ではドラマに注目し、「満州」引揚げ体験を題材とした日本ドラマについて考察したい。研究方法としては、日本のテレビドラマデータベースなどを利用して「満州」引揚げ体験を題材としたドラマを選定し、繰り返し視聴し、ドラマに対するテキスト分析を通じて、各ドラマにおける「満州」引揚げ体験に関する表

(2) 文化的記憶：人と人の接触の中で直接的に伝えられるコミュニケーションの記憶と異なり、文字、図像、儀礼などのメディアや文化的実践によって形成される記憶である。これについてはアライダ・アスマン著、安川晴基訳、『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』、水声社、2007を参照する。

(3) 伊藤守、『記憶・暴力・システム：メディア文化の政治学』、法政大学出版局、2005、p.78。

を考察する。ドラマにおける表象の考察を通じて、「満州」引揚げの歴史がどのように記憶されているのかを明らかにする。言い換えれば、ドラマがどのように「満州」引揚げの歴史を表現し、大衆にどのようなイメージと知を提供しようとするのかを検討するものである。

ただし、本稿で論ずる日本人の「満州」引揚げ体験は、狭義の意味での「満州」引揚げ体験のほか、「満州」移民体験と「満州」支配・植民の体験をも扱う。なぜかと言うと、そもそも「満州」への移民の流出さえなければ、「満州」引揚げという後の日本人の本国帰還も存在しないからである。そして、この「満州」への大量の日本人移民の流出は単なる純粋な移民ではなく、その背景に日本の「満州」への植民地支配があるのは歴然たる事実である。以上を踏まえた上で、ドラマにおける「満州」引揚げ体験の表象についての考察は、「渡満」、「満州」支配と植民、「満州」引揚げという三つの方面から分析していきたい。

二、「満州」引揚げ体験を題材としたドラマ

「満州」からの引揚げと言え、まず1946年5月から1948年8月までの前期集団引揚と1953年3月から1958年7月までの後期集団引揚が考えられる。この二段階の集団引揚の前後、特に中日国交正常化をきっかけに、多くの日本人が個別に帰国した。なお、後期集団引揚まで日本に帰還した人は引揚者と言うが、それ以降帰還した人は中国帰国者または中国残留日本人と呼ぶのが一般的である。したがって、本稿で言う「満州」引揚げは中国残留日本人を扱わず、後期集団引揚までの帰還者のみを扱う。

筆者が整理した結果、今までの「満州」引揚げ体験を題材とした日本ドラマは以下の表のようにになっている。その中、本稿では1990年代以降のドラマに絞って分析していきたいが、その理由は二つある。

一つ目に、戦争経験の語りについて、戦争の直接の経験を持たない人々が多数を占める1990年代以降は「記憶」の時代である⁽⁴⁾と成田龍一氏(2020)が指摘しているように、戦争や引揚げに関する記憶が次第にコミュニケーション的記憶から、文化的記憶へと変化してきていることが挙げられる。本稿で扱うドラマは、

(4) 成田龍一、『戦争経験』の戦後史：語られた体験/証言/記憶』。岩波書店、2020、p.20-21。

まさに文化的記憶が構築され、世代や時代を超えて継承されていくための重要な媒体である。したがって、ドラマによる文化的記憶の構築についての考察という本稿の課題を踏まえ、筆者は1990年代以降のドラマだけを扱うことにする。

二つ目に、1990年代の冷戦構造の崩壊以降、日本が過去に行った侵略戦争と植民地支配の責任を追及する動きが見られ、アジア諸国の被害者が次々と声を上げ始めた。それを受けて、日本では自国の責任を認めて反省し、被害者の訴えに応えようとする動きが見られた。一方、1990年代後半から、日本の責任を認めないナショナリズム的な傾向や歴史修正主義が台頭しつつあり、それが現在においても続いている。日本の責任に関する議論が盛んになっている1990年代以降のドラマを取り上げ、そこに描かれた「満州」引揚げ体験に関する表象の分析を通して、どのような責任論が内包されているかを考察するのは、戦争の歴史と向き合うためである。

上述した事柄により、本稿の研究対象となる作品は1990年代から2010年代までの6本のドラマで、年代順で『生きのびて』、『赤い月』、『開拓者たち』、『遠い約束～星になったこどもたち～』、『レッドクロス～女たちの赤紙～』、『どこにもない国』となっている。

表1 今までの「満州」引揚げ体験を題材とした日本ドラマ

ドラマ	キー局	放送期間	放送回数	原作
『流れる星は生きている』	TBS	1982/05/10～ 1982/07/02	40回	藤原てい『流れる星は生きている』、『わが夫・新田次郎』
『家族の肖像』	YTV	1987/04/02	1回	/
『さよなら雪彦』	NHK	1988/07/23	1回	吉田知子『満州は知らない』
『生きのびて』 ⁽⁵⁾	NTV	1996/02/13	1回	松本悦子『生きのびて』
『赤い月』 ⁽⁶⁾	TX	2004/05/05～ 2004/05/06	2回	なかにし礼『赤い月』
『開拓者たち』 ⁽⁷⁾	NHK BSP	2012/01/01～ 2012/01/22	4回	/
『遠い約束～星になったこどもたち～』 ⁽⁸⁾	TBS	2014/08/25	1回	増田昭一『満州の星くずと散った子供たちの遺書』、『戦場のサブちゃんゴン』、『約束』
『レッドクロス～女たちの赤紙～』 ⁽⁹⁾	TBS	2015/08/01～ 2015/08/02	2回	/
『どこにもない国』 ⁽¹⁰⁾	NHK GTV	2018/03/24～ 2018/03/31	2回	ポール・邦昭・丸山『満州 奇跡の脱出』

三、「満州」引揚げ体験を題材としたドラマにおける表象

(一) ドラマにおける「渡満」と引揚げの表象

1. 「内地」の経済苦のなか王道楽土を夢見た日本人

数多くの日本人が遥々日本から「満州」に渡った理由について、ほとんどのドラマは、その理由を日本国内の経済不況と政府の号令及び鼓動と関連づけている。すなわち、日本国内の経済不況、特に農村の貧困状態という背景の下、日本政府は王道楽土と五族協和という謳い文句で国民の「満州」への夢を掻き立てていた。日本政府は「満州」のことを乳と蜜の流れる郷や夢の国と大いに宣伝し、「満州」に行けば、豊かな人生が待っていると国民に夢を抱かせていた。

したがって、『赤い月』での森田家のような、王道楽土のスローガンに魅せられ、「満州」で立身出世を夢見た日本人が「渡満」した。また、『遠い約束～星になったこどもたち～』において開拓民の子供の佐竹三郎が作文で「満州は夢の国です。でっかい国です。でっかい国に行けば、でっかい畑がもらえて、でっかい家が建てられる。」と書いているように、『レッドクロス～女たちの赤紙～』において開拓民の中川亘が「姉が次女で、僕が三男ですから、親からすれば都合のいい口減らしてことですかね。」と言っているように、広大な土地を手に入れるために、口減らしのために、大勢の困窮した小作農、貧しい農家の次男三男以下や

-
- (5) 『生きのびて』は、「満州」で生まれ育った少女の悦子は、日本の敗戦後、家族と引き離され、生きのびるために八路軍に従軍していた年正と結婚し、その後8年間難難辛苦をなめつくし、ようやく日本に引き揚げたという物語を語っている。
 - (6) 『赤い月』は、夫の森田勇太郎とともに「満州」に渡り、酒造場を興し成功を収めたが、日本の敗戦を機に運命に翻弄されながらも、子供たちを守り抜き、強く生きた女性・波子の物語を中心的に語っている。
 - (7) 『開拓者たち』は、中日国交正常化40年を記念して制作されたドキュメンタリードラマである。戦時中、開拓移民として「満州」に渡り、ソ連の対日参戦後、過酷な避難・抑留生活を経て日本に引き揚げ、戦後の日本で生きるために再びたくましく開墾にあたった人々の物語を描いている。
 - (8) 『遠い約束～星になったこどもたち～』は、終戦後、「満州」の難民収容所で肩を寄せ合って一生懸命に生きようとした子供たちと、彼らを見守っていた大人たちの姿を描いている。
 - (9) 『レッドクロス～女たちの赤紙～』は、戦時中に赤紙——戦時召集状を受け取り、従軍看護婦として「満州」の戦地に赴いた女性たちを描き、特にどのような逆境にあっても博愛の精神と家族への愛を貫いた天野希代という1人の女性の生き様を語っている。
 - (10) 『どこにもない国』は、終戦後「満州」に取り残された日本人の引揚げに尽力した3人（丸山邦雄、新甫八朗、武蔵正道）を描き、葫芦島在留日本人大送還が実現に至った時までの物語を綴っている。

年頃の女性が、政府の号令と鼓動のもとで、開拓移民として「満州」に渡った。そして、『開拓者たち』と『レッドクロス～女たちの赤紙～』における開拓民の話——「小作の次男坊に、帰る場所なんて、ねんだ。ここで生きるしかねんだ。」「我々にはもう帰る場所はありません。」などは、開拓民にとって、生きていくために、「満州」に行くという道しか残されていなかったかのように語っている。その語りに「満州」に渡った以上、「満州」は言われたような理想の国ではないと気づいても、「内地」に帰る場所がないので「満州」で食いしばって生きていくしかなかったという意味合いも含まれている。このように、「満州」に移民した理由が正当化され、日本国内の経済苦のなか王道楽土を夢見た日本人が国策で移民したという物語が表象されている。

2. 終戦間際に始まった日本人の悲劇

1945年夏、秋ごろソ連が攻めてくると想定した関東軍が最終防衛線を設定し、主力を朝鮮との国境地帯まで下げたが、防衛線外側にいた膨大な数の日本人居留民は何も知らずに取り残された。そのことは、『開拓者たち』、『遠い約束～星になったこどもたち～』、『赤い月』で語られている。その後、8月9日ソ連の対日参戦、すなわちドラマの中で言うソ連の「満州侵攻」後、ほとんどの日本人は安全な地を目指して避難し、特に開拓民たちは着の身着のまま必死に逃げた。混乱と苦難に満ちた日本人の逃避行と避難生活は、ドラマで以下のように描かれている。根こそぎ動員で女性、子供や老人の群れとなった避難民たちは、すし詰めになった列車に乗り、避難していた。ソ連軍の進軍を遅らせるために関東軍によって駅や線路が爆破されたので、徒歩での避難を余儀なくされた避難民も少なからずいた。避難民たちは極限の疲労と飢餓に苦しみながら、ソ連軍や現地中国人からの襲撃を避けていた。その過程で、家族と離れ離れになったことが多発し、弱者から次々と亡くなり、集団自決で命を失った人も多数出た。また、『遠い約束～星になったこどもたち～』の中のナレーションの言うように、「足手まといになるからと赤ん坊を自らの手にかける母親。もはや自力で歩けなくなったり、その場でとどまって死を選ぶ老人。直接砲撃を受け、一瞬にして命を失った人々。辱めを受けまいとつかまる前に自ら命を絶ったもの。」など、まさに言葉では言い尽くせない痛ましい悲劇が起こっていた。

そして、ドラマにおいて、戦争が終わっても大勢の日本人が依然として苦しみ

の中にいたことが語られている。略奪に強姦、ソ連軍による暴行で恐怖と背中合わせの日々が続き、窮地に立たされたため子供を中国人に売り、中国人に預けた人が多かった。粗末な難民収容所で飢え、寒さや病気などに苛まれ、次々と命を落とした難民たちの惨状も、ドラマの中で頻繁に描かれている。収容所の庭で掘られた穴に亡くなった避難民が投げ込まれ、野良犬がその辺を回っていたシーン、避難民を救援していた日本人会の人々が日常のように収容所に「今日死んだ人ありませんか」と聞きに来たシーン、母親は魂が抜けたようにぼんやりと死んでいる赤ちゃんを抱いていたシーン、どれも過酷な避難生活の悲惨さを強調し、視聴者の涙を誘うものと言える。さらに、中国人が日本人の家に押し込み、「日本鬼子（日本の鬼め）」と罵りながら日本人を殴ったシーン、勝利に沸き返っている中国人と敗戦国民である日本人という二項対立的なイメージが表象されるシーンなどは、日本人と中国人の地位の逆転を想像させ、敗戦後の日本人の悲劇性を強めている。

そのほか、『赤い月』、『開拓者たち』と『遠い約束～星になったこどもたち～』で、国に「満州」への夢を掻き立てられた結果、偽りの夢の国で見捨てられたという棄民のイメージが強調されている。例えば、『遠い約束～星になったこどもたち～』においてあるお年寄りの避難民は、収容所の庭にある多くの塚を見ながら、「かわいそうになあ。ここに眠っている人たちが、みんな戦争の犠牲者だよ。騙されたんだなあ、私らみんな。満州に行けば、土地がもらえる、豊かな人生が待っている。王道楽土、そんなもんなあ、もともとどこにもなかったんだ。人から力尽くで奪ったもんね、幸せなんかなれるわけがない。愚かな話だよ。私ら捨てられたんだ、日本という国に。」と言ったが、このセリフを通して、棄民となった「満州」移民の悲惨さがひしひしと伝わってくる。

その上、ほとんどのドラマは女性、子供や老人の悲惨な体験という典型的な引揚げ体験を取り上げている。戦争末期の根こそぎ動員とソ連の強制連行により、女性、子供や老人といった抵抗力のない人々ばかりが残されたのは事実である。しかしながら、「在満」日本人全体は中国での侵略移民あるいは植民地での支配民族であり、日本人の生活が成り立ったのは中国人に多大な犠牲を強いたという前提がある。末益智広氏(2022)が1960年代までの引揚げ言説に対し、「女－銃後－引揚げ、男－前線－抑留」という構図が実態以上に強調されることによって、そして、植民地経営のイメージが荒れ地の『開拓民』という無垢な対象に置き換えら

れることによって、植民地責任の問題はぼかされてしまう」と指摘している⁽¹¹⁾。大多数のドラマは、まさにこうして女性、子供や老人といった罪のなさそうな人々の引揚げ体験を中心に描くことで、被害者としての物語を紡ぎ、視聴者の涙を誘うと同時に、加害と被害を分け、植民地責任を希薄化させているのではないかと考える。

以上をまとめると、ドラマの中で、日本国内の経済不況と政府による王道楽土への鼓吹の中、「満州」に雄飛することを夢見た日本人や、生きるために「満州」に入植するしかなかった日本人が描かれている。これらの日本人の引揚げ体験は、ソ連の「満州侵攻」、過酷な逃避行や避難生活という図式のように表象されている。日本という国に捨てられた棄民のイメージを強調しながら、女性、子供や老人といった罪のなさそうな人々の引揚げ体験を中心に語ることによって、悲惨な体験を強いられた「満州」引揚げ者が作り上げられている。『生きのびて』の中には、少ないながらも、敗戦後日本人の生活が一転し、混乱と不安の日々が続いていたことが冒頭に語られている。

(二) ドラマにおける「満州」開拓と植民の表象

1. 「満州」移民を襲った「匪賊」

前にも述べたが、「満州」移民には日本の「満州」への植民地支配に加担したという加害者としての側面があり、いわゆる開拓民の開拓の実態も、往々にして現地住民から土地を奪い、彼らの生活を破壊した名ばかりの開拓に過ぎない。現地住民にとって、強制的に土地をただ同然で取り上げた多くの日本人の入植は、紛れもなく侵略である。こうした略奪に対し、中国人が反発したのも無理はないが、日本側はかえって彼らを「匪賊」と呼んでいる。すなわち、「匪賊」とは、土地を奪われたため、開拓団村などの日本人居留地をたびたび襲撃する中国人現地住民に対する、日本側の呼び方である。「匪賊」に関する語りから、ドラマにおける加害と被害の責任認識を確認できる。

『開拓者たち』において、「あの頃は、知らないことがたくさんありました。中国東北地方にあった満州国が日本の傀儡国家だったこと、安く土地を買いたい

(11) 末益智広、「引揚げの記憶から何が忘却されてきたのか：1960年代までの引揚げ言説」、『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』, 349, 2020, p.13。

て中国人を追い出したこと、反発した中国人がたびたび開拓地を襲い、日本人は彼らを匪賊と呼んでいたこと」というナレーションなどから、略奪と植民地支配に加担したという日本人移民の加害性が認められたと読み取れる。ただし、中国人の土地だと認めず、開拓団村に残って「自分」たちの土地を守ろうとした開拓民の集団自決の物語が、ドラマで壮絶な悲劇として描かれ、開拓民の悲劇性と被害者性が強調されている一面もある。『レッドクロス～女たちの赤紙～』において、「匪賊」の孫といういわゆる敵の治療を断ろうとした軍医に対し、開拓民の中川亘は開拓団が与えられた土地の元々の住民である孫たちにとって、自分たちは無実で、彼らの土地を奪った開拓団こそが憎むべき敵であるなどと論じ返した。このように、中川亘の口を通して、「匪賊」扱いされた中国人の被害の側面が語られ、開拓民としての加害認識も示されている。それと対照的に、『遠い約束～星になったこどもたち～』において、開拓民たちの逃避行の途中の苦難を語る時、「ソ連軍だけではなく、日本人が匪賊と呼んだ現地の人々が私たちを狙ってきます。」というナレーションがある。これはまさに「匪賊」による襲撃という言葉で片付け、開拓民の苦難だけを示し、「匪賊」という呼び方の裏側にある日本人の加害に関して全く言及していないと考えられる。

2. 「満州」支配と植民の責任

日本による「満州」への支配と植民について、各ドラマは以下のように描いている。『生きのびて』において、「満州」生まれ「満州」育ちの悦子は、日本の敗戦を迎えてはじめて、自分はよその国にいるのだと気づかされた。その後、八路軍に従軍した悦子は、日本軍による虐殺や暴行の写真を見ながら、日本軍は大東亜共栄や五族協和と言ってきたが、実際に中国人にやったことは侵略であると聞かされ、後ろめたさや罪悪感を感じたため涙をこぼしたシーンが描かれている。また、夫の年正との話の中にも、日本人が中国の土地で無惨なことをしてきたというような話があった。

『開拓者たち』の中に、小作頭の息子である王春岐の話——「史郎、日本人ここでどれだけの人間殺してるか、どんなむごいことしてるか知ってるか。ここ、俺たちの国だ！」などを通して、日本人が中国人の土地を奪い、残虐な行為を大量にしてきたことが示されている。また、憲兵隊にいた頃中国人を拷問して殺害した罪を償おうとした阿部金次や、炭鉱での同僚の家族を殺した日本軍の罪を聞か

され、同じ日本人としてその罪を償おうとした木戸浦進作などの人物が描かれたことによって、日本人の「満州」支配と植民に関わった罪が認められた。

『遠い約束～星になったこともたち～』では、冒頭部分のドキュメンタリー的なナレーションで、「大陸への進出を目指した日本は昭和6年、満州事変を機に中国への侵攻を開始、中国東北部の占領を進め、翌年には日本の陸軍部隊である関東軍の後ろ盾のもと、満州国が建国されます。(中略)中国は今もこの満州国を国として認めていません。」と日本の植民の歴史を認めた。また、前述の収容所にいたお年寄りの避難民の話も、略奪という王道楽土の実態を鮮明に示している。

『レッドクロス～女たちの赤紙～』では、中国人が開拓民や関東軍に「ちゃんころ」と呼ばれたシーンや見せしめのため「匪賊」の孫が関東軍に公開処刑されたシーンから、五族協和は内実を伴わないものに過ぎず、多くの日本人が中国人を格下の民族のように見下していたとうかがえる。ドラマのナレーション⁽¹²⁾、従軍看護婦の天野希代や軍医少佐の溝口の話でも、関東軍が中国人に対して残虐な行為を行ってきたことが示されている。さらに、共産党軍が開いた共産党思想を教える集会などで、日本が帝国主義のもとで不正な侵略戦争を行い、他国を自分の植民地にしたという事実が語られている。

『どこにもない国』では、主人公の一人である新甫八朗の口を通して、日本の「満州」支配と植民の責任が二か所で語られている。彼は、自分の会社のものを強奪しようとした中国人に対し、日本人に土地を奪われ散々虐げられた中国人の気持ちがよく分かっていると言った。そして、「日本人がしてきたことを思えば、文句の言える筋合いではない。」と丸山邦雄に言った。また、国民党軍では多くの人が今でもすべての日本人を侵略者と見ているという話に対し、彼は「そりゃそうでしょう」という一言で日本による加害を認めた。

『赤い月』の中では、日本による「満州」への支配と植民の責任を認めようとする姿勢があまり見られない。使用人の王の話——「王道楽土、嘘ばかり！五族協和、嘘ばかり！日本人は満州焼き尽くし、奪い尽くし、殺し尽くした。」、終戦後東北民主連軍による人民裁判で日本人の戦犯容疑者は罪状が読み上げられ、最後に銃殺されたシーンという二か所ぐらいで、日本人の加害の側面に言及した。そ

(12) ナレーション：今度は満州にいた日本人が最も恐れていた軍隊、中国共産党軍が陸軍病院に向かってきたのです。それは戦時中の関東軍が中国人に対して行った残虐行為の報復を恐れていたからでした。

れ以外に日本人が自ら加害を語り、認めることは一切なく、むしろ日本の「満州」支配と侵略を肯定することが多く表象されている。例えば、長男の一男が教師を殴ったのは、その教師が「満州」はいずれ中国に支配されることになるだろうと言ったからだと聞いてから、森田勇太郎は態度が一転し、かえって一男の行為を肯定するようになったシーン、一男が自分の出征壮行会で国への忠誠を誓い、祖国の不滅と「満州国」の永遠を信じるなどと壮語したシーンが映し出されている。関東軍将校である大杉寛治なども、国のために「満州」にいた日本人居留民のために尽くした軍人として描かれている。このように、愛国心に溢れる日本人、国のためにわが身を捧げる日本人の物語が大いに語られている一方、他国を侵略し、不正な戦争を起こした日本の責任があまり語らずにされている。

以上をまとめると、「満州」引揚者は紛れもなく被害者であると同時に加害者でもあるが、被害と加害についての語りが各ドラマで異なっている。『生きのびて』は日本の敗戦後から引揚げまで遭った苦難のみを強調することなく、日本による侵略の責任も素直に認めている。『開拓者たち』と『レッドクロス～女たちの赤紙～』は、戦争による悲劇と日本人の被害性を表象しているのと同時に、「満州」支配と植民という加害を自覚し、それへの反省が比較的に多い。『遠い約束～星になったこどもたち～』と『どこにもない国』では、日本人の加害性が認められているが、開拓民の戦争被害者としてのイメージがドラマ全編に貫かれている。したがって、この二つのドラマはどちらかと言うと、日本人の感情移入しやすい被害者物語の方に偏り、それが圧倒的である。『赤い月』では、日本人の被害性が強調されている一方、避難と引揚げの悲劇の原因は日本が行った侵略であるという加害への反省があまり見当たらない。

なお、ほとんどのドラマに描かれた戦争はもっぱら日本側の戦況が悪化した以降（敗戦時）のことを指しているという点にも注目すべきである。これは、以下の二つのことを意味している。一つ目に、ドラマで日本人移民は戦争被害者として表象されているが、戦争＝敗戦時という語り方は、日本人は戦争被害者と言うより、敗戦の被害者であると想像力を働かせている。二つ目に、戦争＝敗戦時という語り方は、敗戦後の日本人の被害体験が大きく取り上げられ、戦時中の日本人の暴行があまり言及されていないことにつながっている。実際に、『生きのびて』以外の5本のドラマで、戦時中の日本人による中国人への加害が認められて

も、日本人による暴行は曖昧に語られていることが多く⁽¹³⁾、日本人の被害体験ほど詳細的に描かれていない。その結果、『生きのびて』以外の5本のドラマで、日本人の被害性が切々と伝わり、被害者意識が強く示されているが、日本人の加害責任がやや希薄化している。

四、おわりに

以上のように、本稿は1990年代以降の「満州」引揚げ体験を題材とした日本ドラマを取り上げ、テキスト分析をすることで、「満州」移民、「満州」支配と植民、「満州」引揚げがどのように表象されているかを検討してきた。分析した結果、ほとんどのドラマで、「満州」引揚げに関する記憶は以下のように構築されている。日本国内の経済不況や政府の号令と鼓動の影響で、数多くの日本人が「渡満」した。日本の敗戦とともに彼らの夢が破れ、ソ連の「侵攻」、苦難に満ちた逃避行と避難生活に代表される引揚げ体験が語られている。棄民のイメージが強調され、女性、子供や老人といった罪のなさそうな人々の引揚げ体験が中心的に取り上げられているので、より一層視聴者の涙を誘発する。こうして悲惨な体験を強いられた戦争被害者としての「満州」引揚げ者の物語が紡がれている。また、「満州」への植民地支配という加害の側面について、『生きのびて』は被害の意識に偏ることなく、日本の中国人に対する加害も客観的に物語っている。それに対し、戦争＝敗戦時という語り方の影響もあり、ほかの5本のドラマは、中国人に対する加害についての語りが日本人の被害体験を描くほど詳細的ではない傾向にある。要するに、「満州」引揚げ体験を題材とした1990年代以降の日本ドラマのほとんどは、日本人の被害の側面に重点を置きながら、「満州」支配と植民の責任認識がやや希薄だと考える。

「満州」引揚げの体験で、日本人は加害と被害の重層構造に置かれている。ドラマで「満州」引揚げ者の被害者物語が実態以上に強調されると、「満州」での植民者としての加害責任が捨象されてしまう。すなわち、引揚げに至るまでの歴史的背景やその被害の実態への追及が不問に付される恐れがある。したがって、文化

(13) 141ページにおける王春岐の話や142ページの注(12)に書かれているセリフはその例である。これらのセリフから、日本人が中国で残虐な行為を行ったのが分かるが、どのような暴行かがはっきり分からない。

的記憶を構築して伝達するという機能を持つドラマは、「満州」引揚げの歴史的事実を客観視し、忠実に語り継ぐべきである。そして、われわれ人間として、高橋哲哉氏の指摘した応答可能性としての戦後責任⁽¹⁴⁾を果たしていくために、ドラマなどを配信するマスメディアを活用し、その歴史を忠実に継承するためのできる限りの努力をしていくことが求められると考える。

参考文献

- アライダ・アスマン著、安川晴基訳、『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』、水声社、2007。
伊藤守、『記憶・暴力・システム：メディア文化の政治学』、法政大学出版社、2005。
成田龍一、『「戦争経験」の戦後史：語られた体験／証言／記憶』、岩波書店、2020。
末益智広、「引揚げの記憶から何が忘却されてきたのか：1960年代までの引揚げ言説」、『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』、349, 2020, p.11-26。
高橋哲哉、『戦後責任論』、講談社、1999。
安藤裕子、「和解の記憶の欠落—戦後日本における『認罪』の表象—」、『アジア太平洋討究』、巻25, 2015, p.69-78。
坂部晶子、『「満洲」経験の社会学—植民地の記憶のかたち』、世界思想社、2008。
南誠、『中国帰国者をめぐる包摂と排除の歴史社会学』、明石書店、2016。
劉罡、「満洲引揚げ者をめぐる被害者言説の形成」、『名古屋大学人文学フォーラム』、巻2, 2019, p.237-250。
蔭静、战后日本“満洲”返迁经历の文学表象及其思想史位相：[博士学位论文]、东北师范大学、2019. DOI: 10.27011/d.cnki.gdbsu.2019.000164。

(14) 高橋哲哉、『戦後責任論』、講談社、1999, p.40。